

平成 30 年度四国地域評議会報告

日時：平成 31 年 2 月 7 日（木） 13:00～16:00
場所：森林総合研究所四国支所 会議室

1. 評議会委員及びオブザーバー（敬称略）

評議会委員

福永 泰久 特定非営利活動法人環境の杜こうち副理事長
大谷 慶人 国立大学法人高知大学農林海洋科学部教授
三好 誠治 一般社団法人愛媛県木材協会専務理事

オブザーバー

濱本 高光 四国森林管理局森林整備部技術普及課長
吉井 二郎 高知県立森林技術センター所長

2. 議事次第

- 1) 開会挨拶
- 2) 評議会委員およびオブザーバー紹介
- 3) 平成 30 年度における活動等の概要
四国支所、林木育種センター関西育種場、森林整備センター中国四国整備局から活動概要等を報告
- 4) 研究の実施状況と成果の概要
佐藤重穂 「野生動物管理技術の高度化」
酒井寿夫 「降雨・溪流水質の長期モニタリングの取組について」
長谷川元洋「土壌ブロック交換法による土壌動物群集の種組成決定要因の解明」
- 5) 業務運営及び地域ニーズに関する意見交換
- 6) 講 評
- 7) まとめ
- 8) 閉会挨拶

3. 委員及びオブザーバーから意見・要望等と対応方針等

意見・要望等	対応方針等
（委員） 広葉樹は古くより土木工事の資材として利用されてきた。江戸時代に高知県内の主な河川に作られた堰にも丸太や粗朶（そだ）が使用されており、現在も水中で朽ちることなく残存している。また、当時の書物には『樹種はクリ、カシが良い』と記されているところでもある。 平成 3 年に当時の建設省通達により河川計画は「多自然型川づくり」が基本とされ現在に至っているが、現場では必要な広葉樹材（量・サイズとも）が入手できない現状がある。 今後は生物多様性の観点からも林業における選択肢の一つとして広葉樹の利活用に着目した研究テーマへの取組を是非とも希望する。	（四国支所） 広葉樹の利用については森林総研としても取り組まなければならないテーマとして認識している。これまでも研究員個々のレベルでは関連した課題に取り組んでいたが、所として対応する観点から国内に現存する数種類の広葉樹を対象に、どのような利用方法があるかを研究する運営費交付金プロジェクト課題が今年度から立ち上がっている。 林業においては、広葉樹は伐採コストが高いことがネックになっているのが現状である。しかし、愛媛県では皆伐跡地に広葉樹を植栽する際にクリを植えることも検討されていることから、通直性のよいクリの開発等が進めば将来的には利用できる材も出てくるのではないかとと思われる。
（委員） 建築基準法が昨年改正されたが、改正の大きな趣旨は中大規模建築物における	（四国支所） 公設試等からの要望については、今後

木造化推進である。これまで中大規模建築には集成材あるいは近年ではCLTが利用されているが、これからは大径材を無垢のまま利用可能にすることが地域における林業・木材産業の活性化のためにも重要な課題になってきている。

しかしながら、大径材を平角で乾燥する場合、強度にも影響を及ぼす内部割れが起りやすいため、大径材利用促進のためにも現場の経済ベースに乗るような乾燥技術の開発及び技術的な支援・指導をお願いしたい。

大径材の心去り材を加工した場合や建築物に利用した場合における長期荷重等に関する強度的なデータは意外に少ない。今後の中大規模建築物における木造化推進及び大径材の利用促進を図るためにも心去り材の強度に関する研究を更に進めていただきたい。

(委員)

開発された精英樹や特定母樹などの優良な品種は、農作物や果樹のように品種登録は行われているのか。また、苗木業者や利用者に対して収益を得るため制度はあるのか。

(オブザーバー)

国有林では、シカ被害問題と並行してノウサギによる被害も顕著になりつつある。くくり罠や箱罠も試してはいるが思うように捕獲できない。他支所等も含め捕獲手法についての有効な情報があれば提供していただきたい。

(委員・オブザーバー)

本日の研究紹介を拝聴しながらこれまで木材生産を主目的としてきた林業から現在では生態系への配慮等も観点に入れた研究が行われていることに対して大変頼もしく感じた。

世界的にも持続的な発展が一つの大きなテーマになっている。再生可能な資源である木材を土木資材や燃料等として活用することは地域振興のうえでも重要であり、また、森林や木材は炭酸ガスの吸収・固定の面でも大きな役割を果たし

も積極的に対応したい。

現在、森林総研では外部資金による研究プロジェクト「要求性能に応じた木材を提供するため、国産大径材丸太の強度から建築部材の強度を予測する技術の開発（平成28年度～32年度）」が進行中である。委員から要望のあった点についても獲得目標の一つとして研究が実施されているところであり、結果を楽しみにしていただきたい。また、林業機械のロボット化に伴い、造材の際に強度を判別できるプロセッサも開発中であり、将来的な展望として山から材を出す段階で品質等の仕分けが可能になれば新しい取組も期待できるのではないかと考えている。

(関西育種場)

緑化樹など登録されているものもありますが、品種登録は行われておりません。また、開発品種は、当方から原種として府県などに有償で配布された後、府県などによって生産された種子や苗木が苗木生産業者に供給され、そこで生産された苗木が造林者に届く流れとなっており、苗木業者などから収益を得るものとはなっておりません。

(四国支所)

主伐・再造林が進むにつれ、戦後の拡大造林の時期と同様にノウサギによる被害が発生しやすい状況になっており被害は今後も大きくなるだろうと予測している。森林総研としてもノウサギによる被害対策にしっかり取り組んでまいりたい。

(四国支所)

委員、オブザーバーの方々から貴重なご意見をいただきました。ありがとうございました。中でも広葉樹に関する研究、木材利用に関する研究、森林生態系に関する研究について要望と同時に評価もしていただき、ありがたく拝聴いたしました。皆さまからいただいたご意見を日々の業務に反映させ、四国支所の研究活動にも活かして行きたいと思っております。

四国森林管理局様には職員及び四国支

ている。今後とも生態系及び炭酸ガス双方のことを考えながら更に研究を進めていただきたい。

森林は地上の生態系を網羅するような自然系であるが、その中で生態系を明らかにする地道な研究は、今後も人間の暮らしに役立つことに通じることから非常に大事だと感じた。引き続き生態系分野の研究を進めていただきたい。

近年の森林に関する研究を目指して入学する学生の中には海との関わりに興味を持つ学生も少なくない。本日紹介された降雨・溪流水の水質に関する研究などは河川から海までを繋げる内容だと思われる。今後は海との関わりに興味の持つ学生も引き入れて更に研究を進展させていただきたい。

国産材の増産は全国的な取組みとなっているが、山村地域では人口減少と高齢化が進行しており、その中で皆伐への対応と同時に持続的な森林管理も求められている。今後は生態系を考慮しながらどのような森林を作っていくのかが更に重要になるとと思われる。

林業・木材産業が大きく動いている現状において、昨年の公開講演会テーマとなった皆伐や開催を計画中のシンポジウムのテーマである大径材などといった刺激的なテーマについて県の行政、研究と連携しながら更に発信していただきたい。

建築サイドは木材を林業サイドは異なる視点、つまり建築物に使用する材料という観点で見えており、含水率の変化による荷重強度など、材質や材の性能に対する関心が高い。国産材に対する関心の高まりを着実に利用に結びつけるためにも木材の性能評価に関する研究を更に進めていただきたい。

四国支所とは現地検討会あるいは各種委員会委員などを通じ連携をさせていただく機会が多く、大変お世話になっている。

四国森林管理局ではコウヨウザンの3世代プロジェクトを実施しており、現在第3世代が萌芽し既に80cmほどに成長している。今後は、それらの育林技術の確

所としても大変お世話になっております。また、今年からは新たに情報交換会も始まりましたので、今後も協力関係を深めたいと思います。

高知県立森林技術センター様にはむしろ私どもがご協力いただいているところです。今後ともよろしくお願いいたします。

第4期中期計画期間に入り、組織としてこれまでよりもより強い情報発信を重視しています。今必要な情報を我々がどのようにして出していけるかを常に考えながら行動していますが、まだまだ不十分なところもあるかと思っています。本日はいただいたご意見も役立てて行きたいと思っております。

四国支所だけでは人員の問題もあり、全てをカバーすることは出来ませんが、研究所及び他の支所とも連携しながら必要な情報発信に努めたいと思います。

立や再造林のための苗木の生産についても検討課題としなければならず、今後とも四国支所始め、皆さま方のご指導・ご協力をお願いしたい。 高知県では第3次産業振興計画を実施中であり、林業分野では、原木生産の更なる拡大と木材需要の拡大に向けた低コスト再造林、また、木材の加工体制強化等にも取り組んでおり、今後ともご指導・ご協力をお願いしたい。	
--	--